

論文内容要旨

氏名	もり たかふみ 森 隆史
学位論文題名	Subfoveal Choroidal Thickness and Axial Length in Preschool Children with Hyperopic Anisometropic Amblyopia
<p>遠視性不同視は片眼弱視の主要な原因の一つである。遠視性不同視弱視では、屈折異常の強い側の網膜像は不鮮明となるために、視覚中枢の発達が阻害される。遠視性不同視症例の眼球には、眼軸長の左右差があり、軸性遠視によって球面屈折値の左右差が生じている。この眼球形態の左右差の原因として、先天的な後眼部の形成不全と、出生後の正視化現象の遅れが挙げられている。新生児の眼球は小さく、そのほとんどが遠視である。生後の視覚刺激によって眼球形態の発育とともに、視覚フィードバック機構により遠視は減少し正視に向かう。これに対して、遠視性不同視では、先行して存在した微小斜視や、乳幼児期の寝遊びなどの生活習慣による片眼の不使用が正視化現象の遅れを招くと考えられている。実験動物においては、正視化現象には脈絡膜の形態変化が関与するといわれている。しかし、ヒトにおいては、正視化現象における眼軸長の伸長への脈絡膜の関与については十分には解明されておらず、遠視性不同視弱視での脈絡膜形態については未知である。</p> <p>近年の光干渉断層計 (OCT: Optical Coherence Tomography) の進歩により、脈絡膜が観察可能となり、その厚みが測定できるようになった。OCT を用いた健常者を対象とした研究により、脈絡膜厚と眼軸長とに負の相関が存在することが報告されている。</p> <p>本研究は、不同視の形成への正視化現象のかかわりについて明らかにするため、遠視性不同視弱視症例の中心窩下脈絡膜厚と眼軸長との関係を、日本人の未就学児を対象にして調査したものである。対象は遠視性不同視弱視と診断した 3 歳から 6 歳の 24 症例と、年齢を適合させた健常児の対照群 12 例 24 眼である。本研究では、両眼の等価球面屈折値に、1.5 ディオプトリー以上の差を認めるものを不同視と定義した。等価球面屈折値 (平均値±標準偏差) は、遠視性不同視弱視症例の弱視眼では+ 4.98 ± 1.07 ディオプトリー、僚眼では+ 2.19 ± 0.63 ディオプトリー、健常対照群では+ 1.04 ± 0.55 ディオプトリーであった。遠視性不同視弱視症例の弱視眼では、僚眼に比較して眼軸長は有意に短く (弱視眼: 407.3 ± 54.2 μm versus 僚眼: 357.7 ± 54.3 μm, Paired t-test, p<0.05)、中心窩下脈絡膜は有意に厚かった (弱視眼: 21.16 ± 0.64 μm versus 僚眼: 22.08 ± 0.72 μm, Paired t-test, p<0.05)。また、脈絡膜厚と眼軸長とに負の相関を認めた (r = -0.50, p<0.01)。そして、これらの脈絡膜厚は、健常児 (326.0 ± 62.1 μm) に比較して大きかった。</p> <p>本研究の結果から、遠視性不同視弱視症例の中心窩下脈絡膜厚は、正視化の遅延を反映していると考えられた。</p>	

※日本語で記載すること。1200字以内にまとめること。